

第五章 佐賀の亂及西南の役

一、佐賀の亂

聯隊の編成成りたる翌月、即ち明治七年二月、前參議江藤新平等佐賀に兵を起し、其の勢猖獗にして、官軍利を失ひてしばしば破る。當時皇政維新の鴻業漸く成ると雖も、社會の諸制度未だ全く整はず、人心動もすれば動搖せんとする時であつたから、明治天皇殊の外宸襟を惱まさせられ、特に吾聯隊に對して出征を命せらるゝに至つたことは、第二章近衛兵の名譽の條に述べた通りであるが、出發に臨みて畏くも、陛下は太政大臣・征討總督・同參軍・陸軍大輔及び近衛聯隊長等を假皇居に召されて、左の勅語を賜つたのである。

勅語

佐賀賊徒征討ニ付特ニ總督ニ假スニ朕カ親軍近衛歩兵第二聯隊ヲ以テシ朕カ泰元ヲ保護スルノ意極メテ切ナルヲ明ニス汝等能ク斯旨ヲ體シ奮發從事速カニ平定ノ功ヲ奏セヨ聯隊長以下感激措く所を知らず、一死君國に奉ずるの時臻れりと爲し、三月一日歩武堂々

屯營を發して横濱に至り、同地より乗船して海路神戸に赴く、方に戦地に入らんとする時、賊は既に風を望んで靡き、忽ち潰散するに至れぬ爲め、聯隊亦歸京の命に接し、三月十日東海道を経て屯營に凱旋した。

斯くも速かに賊徒平定を見るに至れるは、熊本鎮臺諸兵の奮戦に由れること勿論ではあるが、一面には、我が近衛兵の出動を風聞して、賊勢頗に挫け闘志を缺くに至れることも亦争はれぬ事實であつて、是れ所謂戦はずして敵を屈するもの、陛下の親軍たる威嚴はこの邊に最もよく顯はれてゐると謂はなければならぬ。

二、西南の役

次で明治十年二月西南の亂が起つた。西南の亂とは、彼の薩摩の西郷隆盛の亂を云ふので、隆盛は維新の鴻業を翼成したる功臣であつたが、征韓問題から當路者と意見を異にし、官を辭して故國に遠り、鹿兒島に私學校を建て、専ら育英の事に身を委ねつゝあつたが、暗殺問題起るに及んで、同志の士桐野利秋・篠原國幹以下及び私學校生徒等に擁せられ、政府に詰問の筋ありなど、稱して、二月十二日私學校生徒を中心とせる二萬の壯兵を率ゐて

鹿兒島を發し、東上の途上先づ熊本鎮臺を圍んだ。

鹿兒島に於て、私學校生徒等不穩の趣、天聽に達するや、天皇甚く宸襟を惱ませ給ひ、熾仁親王を勅使として簡派し懇ろに之を慰諭せられんとし、勅使宮方に出發せんとせらるゝ時、右の報京都の行在所に到達したるを以て、聖上赫怒、即日隆盛以下の官を削ぎて征討命を發せられ、熾仁親王を以て直ちに征討總督に任じ、近衛隊を始め全國の鎮臺に出征の命を下させられた。乃ち聯隊は二月十九日神戸へ出張の命を受け、即時出戰準備を整へて、聯隊本部及び第一大隊は翌二十日横濱拔錨、同二十三日神戸に着し、翌二十四日征討總督官を護衛して海路博多に至り、第二大隊は一日後れて二十四日神戸に着き、陸行して京都に赴き、禁關守衛の任に就いたが、三月十日更に出場の命を拜し、御守衛の任を歩兵第七聯隊の一部隊に譲つて、直ちに戦地へと向つた。

出戰隊(當時)幹部左の如し

聯隊長 中佐國司須正、副官大尉山根信成、旗手少尉南孝光、軍吏補市原直好、二等軍醫田代基徳。

第一大隊 長少佐津野成章、副官少尉福崎正名、軍吏補早川昇、軍醫副山田俊麿。

第一中隊 長大尉伊達一民、小隊長中尉高坂知次、少尉柿並徳隣・加藤三郎・山本居周。

第二中隊 長大尉伊地知繁成、小隊長中尉大谷利章、少尉門田正壽・入江祐成・原田繁。

第三中隊 長大尉大西恒、小隊長中尉横地剛、少尉松田是友、横田信好、山田有信。

第四中隊 長中尉湯地弘、小隊長中尉栗屋充藏、少尉石黒重雄、益山兼造。

第二大隊 長少佐清水敏義、副官中尉益山行丈、軍吏補福田篤敏、軍醫手塚真仙。

第五中隊 長大尉波多野義次、小隊長中尉片山義次、松永正敏、少尉門司正人、山本千代之助。

第六中隊 長大尉馬屋原務本、小隊長中尉寺島直道、杉治平、少尉左近允尙一、河野通幸。

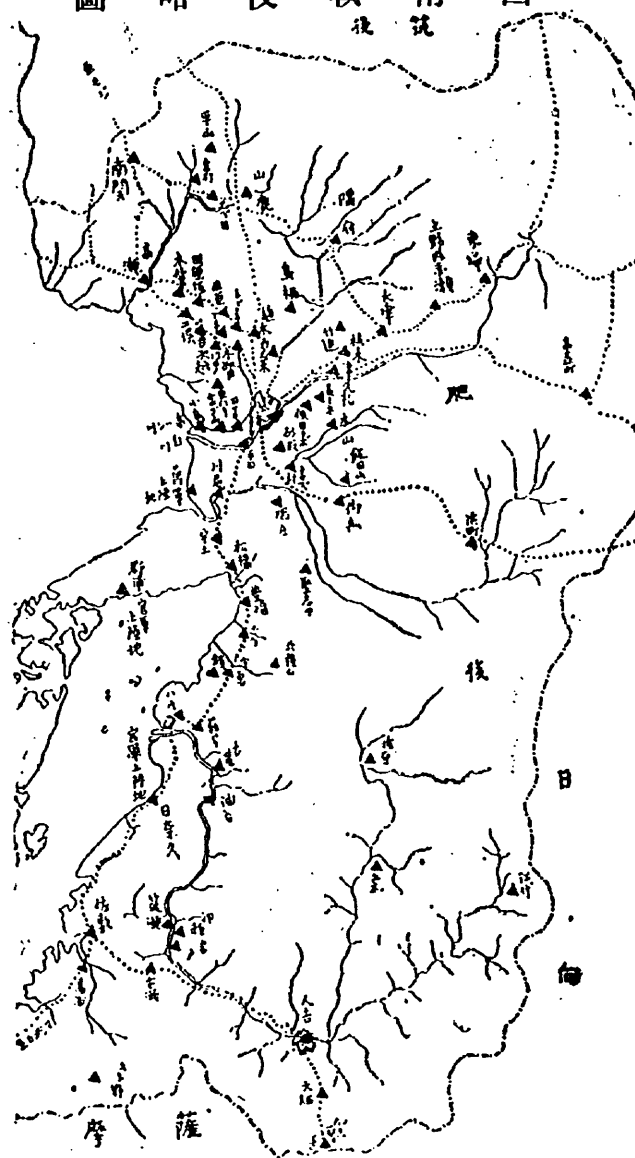
第七中隊 長大尉比志島義輝、小隊長中尉馬渡平藏、河野通真、少尉長尾尙揖、試補渡邊充。

第八中隊 長大尉遠山規方、小隊長中尉樋口安時、少尉野木精之、稻本正雄。

我が征討軍の作戦は、軍を正面軍と背面軍とに分ち、各軍を更に三旅團に編成し、正面軍(征討)は博多に上陸し、賊軍を撃破しつゝ南下して熊本を救援し、背面軍(別働)は八代灣に上陸して、先づ賊軍の後方連絡を遮断し、北進して正面軍と力を戮せ、兩面より賊を挾撃して、熊本城の重圍を解かんとするにあつたのである。

聯隊は正面軍に屬し、第一大隊(隊缺)は聯隊長園司中佐自ら引率して、第三旅團下に在つて、熊本縣下山鹿方面に戦ひ、第一大隊第一中隊及び第二大隊は同縣下二俣に到つて第二旅團(司令官少將)に入つたが、同旅團は我第二大隊の増加を待つて、三月十日田原坂を攻畧し、賊を向坂に壓迫して、同月二十三日山鹿口の官軍と連絡を通じ、茲に始めて吾聯隊は植木に於て相會するを得た。軍旗は聯隊長と共に第一大隊(隊缺)に在つたが、二月二十六日鍋田

西 南 戰 役 略 圖



(45)

0309

川に於ける戦闘は吾が歴史上に特筆すべき價値がある。

軍旗鮮血を浴ぶ

乃ち此日、乃木少佐(希)の率ゐる歩兵第十四聯隊第一大隊(若干)は山鹿附近鍋田川に於て、優勢なる賊軍と遭遇戦を開き、腹背に敵を受けて、非常の苦戦に陥り、死傷算なし。國司聯隊長の率ゐる第一大隊(隊中)は博多に上陸以後、殆んど休憩を取るの怠なく、即時戦地向つて急行軍を行ひつゝあつたが、途上右取戦の報に接するや、彌々速力を早めて戦場に急行し、聯隊長は軍旗を先頭に植立して、勝ち誇れる賊陣目蒐けて勇猛果敢なる突撃を决行し、大いに賊軍を破つて、近衛兵の威力を示したが、此の際旗手南少尉は賊の狙撃を受けて、壯烈無比、第一番の戦死を遂げ、其の鮮血はほどばしつて軍旗の旗竿を染むるに至つたのである。

(是より、此の戦時中は旗手を置かず、軍旗は總督本營に安置して保護す)

四月十五日熊本城の重圍を解いて、連絡通すや、聯隊は再び二つに分かれて、第一大隊(隊中)は鹿兒島地方に進進し、第二大隊及び第一大隊第二中隊は聯隊長指揮の下に第一旅團に屬して日向に向ひ、各地に轉戦して、到る處賊軍を撃破し、漸次これを南方に壓迫して、

九月三日各道追撃の官軍齊しく鹿兒島に會し、賊を城山に追ひ籠め、九月二十四日拂曉の
總攻撃を以て、茲に賊徒を殲滅し、隆盛以下幹部は悉く自刃して果てた。

●賊徒平定●凱旋

九月二十七日、征討總督熾仁親王殿下鹿兒島に入り、大隊長以上を召して祝宴を張られ、
征討旅團の編成を解き凱旋を命ぜらる。
十月十七日、聯隊は屯營に凱旋した。

此の戦役に於ける吾聯隊の損害

△戦死 將校 〇〇 下士 五十七名、卒 三百三名。

犠牲者の多かつたことは、取も直さず最も勇敢に戦つたことを立證するものにて、此の西
南之役は、徵兵令施行以來初めての戦役であつて、敵は名だゝる薩摩軍人の壯兵、官軍は
新しく徵募したる庶民兵であつた。慄悍血氣の賊兵は、好んで拔刀隊を組織し、白刃を抜
連れ、吶喊して我が陣地に斬入るを以て得意と爲し、白兵戦に於ては事實官軍に勝算はな
かつた。然れば拔刀隊の名を聞いたゞいで、官軍兵は忽ち一種の恐怖に襲はれ、夜中雞
が羽ばたきして飛込んだのを、敵襲を間違へて、倉惶隊を亂して走つたといふ如き奇劇を

すら演じたのである。この間に在つて、（近衛）萬丈の氣を吐き、（皇軍）の威を示したものは、
各鎮臺の選抜兵を以て編成せられた我が近衛隊であつた。彼れ拔刀を以て迫れば、我れ銃
槍を以て應じ、戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取る、曾て一度も退くことを知らず、後に
は赤相（近衛兵の異名）の往くところ、早くも風を望んで消え去り、敵影を見ざる有様となつたので
ある。

十一月二日、天皇陛下特に日比谷練兵場に臨幸、近衛諸兵の凱旋式を舉行せられ、左の
優渥なる勅語と共に酒肴料を下賜せられ、次で又慰勞休暇を賜つた。

勅語

曩ニ西南賊徒征討ニ際シ各地奮戦途ニ平定ノ功ヲ奏ス朕深ク之ヲ嘉ス

聖恩鴻大、將卒たい感激するのみであつた。
尙ほ此の戦役中、三月十六日、天皇陛下には戰勞御慰問として、侍從番長高崎正風を戦
線に差遣せられ、優渥なる聖旨を傳達せしめらるゝと共に、軍人軍屬並に傷疾者に酒肴料
又は菓子料を御下賜あらせられ、また 皇太后 皇后兩陛下より負傷者に對して、左記目
録の如く御下賜品があつた。

一、綿撒系 百、端 一、英吉利リント 二十卷 一、帛木綿 五百端

一、葡萄酒 千五百本 一、煙 草 八百斤

右の内綿撒系といふのは、今日の謂ゆる糊帯であつて、その綿撒系に就ては宮内卿より特
に左記の如き添書が附せられてあつた。

今般戦傷ノ者へ下賜候 綿撒系ハ 兩 皇后(皇太后、皇后)女官ト共ニ 御撒シ被遊候儀ニ候
條此旨モ 相心得候様一同へ御達有之度此段申進候也

三月三十一日

宮内卿 徳大寺實則

將卒傳へ聞きて、皇恩の優渥無邊なるに感泣するのみであつた。